

一冊の図鑑との出会い

鳥取県立倉吉西高等学校
校長 松本 清治
(中部地区実行委員会 委員長)

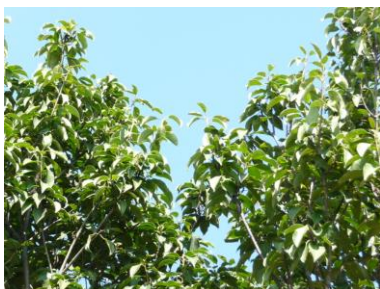
私が理科が好きになったのは、一冊の図鑑との出会いであった。小学校5年生の時、学校で図書の斡旋があり、その中に岩石図鑑があった。特に岩石に興味があったわけではないが、岩石には、宝石になるものがあり、とてもきれいだったので注文することにした。それからは、歩いて帰る一時間の下校時間はほとんどその図鑑を見ていた。すると不思議なことに、今まで何気なく見ていた石に名前があり、違いがあることに気づいた。何も知らないときは、石はみんな同じ石でしかなかったものが、違う石として認識できるようになってきた。これはとても驚きであった。知ると言うことは、違いが分かることなんだと初めて分かった。そして、石を構成している雲母や長石、石英などの鉱物にも興味が及ぶようになり、石を見ることがとても楽しくなった。

小学校の教員をしているとき、ふとこのことを思い出し、普段何気なく見ている野草や樹木の名前や違いが分かるようになると、野山を歩くのが楽しくなるだろうと思い、学校の裏山にこども達を連れて行った。ひとつでも分かるようになると次の興味がわいてくるだろう。まず、確実に名前を覚えさせるため、見た形から名前を連想させた。例えば、ノビル。こども達は、いろいろな名前を言うが、その中に「葉っぱが丸くて長く伸びているから、・・・」と特徴を捉えて名前を連想する子がいる。そこで、「そのとおり、よく伸びているので、これはノビルと言います。」と解説するとほとんどの子は、すぐ覚えてくれた。また、「食べられるんだよ。」と言うととても興味を持ってくれた。ソヨゴやエゴノキなども葉っぱの形や丸い実がどんな味がするなど話すと、よく覚えた。今までに知っている知識や体験と関連づけることが大切であると分かった。



ノビル

今は、学習内容が中学校になったが、小6で学習していた地層のでき方では、よく露頭の観察に連れて行った。露頭を観察した後の学習では、観察した場所がどんな地殻変



葉っぱがそよいでいる
(波打っている) ソヨゴ

動によってできたのか連想することができ、遠い昔に思いをはせ、想像を広げていた。ただ知るだけでなく、自分の生活に関連させたり、想像を広げることができると楽しいと感じてくれる。楽しいと感じさせると、もっとよく知りたいと思うようになる。理科とは、そんな教科だと思う。こども達が、もっと理科の楽しさを知ってくれたらと思う。(写真: PIXTA)